

亦同じい事を記してある。近年になつて、更
に同郡談議所なる鹿島神社前の小瀧であると
して、標柱を立てたりした。いづれ虚構のも
のではあるが、俗に鳴和瀧と書くのは辭義に
合はない。

ナルミツガハ 鳴水川 羽咋郡中山(上中
山)領山より出で、上棚領で箱屋川に落合ふ。
流程二軒弱。

ナルワノタキ 鳴和瀧 ↓ナルハノタキ
鳴者瀧。

ナルワヤキ 鳴和瀧 瓦焼の置物に鳴和雪
山などと銘じ、又は天正の年號を刻したもの
がある。いづれ誤謄化しものに過ぎぬ。

ナルキカツミツ 成井勝光 又春田氏。通
稱重兵衛。曹製作の名工で、もと京都の人。
元和九年來つて仕を加賀藩に求め、數年の後
十人扶持を得た。養子勤助勝光以後同銘三代
を經、五代次郎兵衛に至り、初めて雲海とい
ひ、子孫その號を襲いだ。六代勤助光尙は享
保・元文の頃の良工で、變形の兜を作るに長じ
た。世に單に雲海といはれたものは是である。
七代勤助勝尙その技父に劣らず、八代五郎九
郎又は勤助光友、九代養子勤助光友を經、安
永の頃に十代勤助光永あり、文化から天保に
は十一代勤助光定があつた。

ナンエツジシキ 南越陣記 四冊。前田家
編輯方の編する所で、武田耕雲齋の越前に於
ける投降一件を録する。

ナンキユウヒロク 南宮秘録 前田齊泰の
子襲之丞利行の事跡を下村重榮の記したもの
の。南宮とは利行の居所で、兄の利義と同じ
く松間のことであらう。

ナンケイ 南桂 金澤時宗玉泉寺二代の住
持で、洞雲院其阿南桂といはれた。正徳二年
四月廿四日歿。

ナンゴウ 南郷 江沼郡山中谷に屬する郡
落。藩政時代に南江に作つたのは、草體から
來た誤である。山口記慶長五年八月三日の條
に、山口玄蕃の家臣成田勝左衛門・山口源右
衛門・吉井吉兵衛・青木三郎右衛門等が、南郷
の桑島まで進み、弓・鐵炮を以て前田勢に打
つて懸つたといふもこの地である。

ナンコウケツベツノズ 楠公訣別圖 前田
綱紀は古今の人傑中最も大楠公の忠誠を憧憬
した。朱舜水が水戸侯徳川光圀の聘に應じて
江戸に在つた時、綱紀は儒臣五十川剛伯をし
て就きて學ばしめ、遂に之を介して楠公傳を
草せんことを求めたが、舜水は傳に代へるに
贊を以てせんと請うた。綱紀乃ち先に狩野探
幽をして描かした楠公訣別の圖を送り、舜
水は寛文十年之に贊した。後光圀が楠公の碑
を湊川に建てるに及びその碑陰に刻した文は
即ち之を採つたのである。

ナンゴウジヨウ 南郷城 江沼郡南郷なる
八幡神社の北方山地に在つた。弘治元年朝倉
宗滴加賀に入るとき、一揆の魁黒瀬掃部允之
に據つたが、防禦に堪へずして山中堡に逃れ
たといふ。

ナンゴウハチマンシヤ 南郷八幡社 江沼
郡南郷に在つて、岡島八幡ともいひ、今は單
に入幡神社と號する。茂徳紀聞に、加賀藩の
土岡島市正は、大聖寺城攻撃の際、丸で苦
戦して死んだ。或は重傷を負ひ南郷に退いて
歿したともいはれる。その後近村に死骸の怪
異があつたから、初は石を置いて祀つたが、
大聖寺侯前田利章の室保壽院が社殿を建て、

敷地天神の末社八幡を勧請したとある。市正
は備中一吉の二子である。

ナンコンキ 難混記 異本寶永誌は、寶永
誌に、難混記等を参照して編纂したものであ
る。その難混記といふのは、三州古城のみを
詳しく記して、紙數五十枚許のものだと書い
てあるが、今傳はらないやうである。

ナンスイ 南水 金澤淨禪寺の僧。慶長十
六年前田利常が越中淨禪寺の天瀧宮を金澤に
移した時、其阿南水に命じて月次迎歌を奉納
せしめ、連歌料十二石を寄進した。淨禪寺は
後に玉泉寺と改めたものである。南水は慶安
二年四月十八日歿。

ナンゼンジリヨウ 南禪寺領 京都南禪寺
領に能美郡得橋郷及び石川郡笠間東保のあつ
たことは、乾元元年乃至應永廿八年の文書に
ある。得橋郷の領は佐野村・佐羅村・今村府
南社主職、并に得南・益延・長恒名であつた。

ナンチンニヒヤクイン 難陳二百韻 一冊。
金澤城北の併人蘇守は不易、城南の人山隣は
流行を標榜して相對峙するとした、蓮二坊支
考の作つた兩軍詞難陳、詞が載せられ、蘇守
の發句による百韻、山隣の發句による百韻、
その他加能人の多數の句が收めてある。序は
蓮二坊、後序は享保卯のとし菊月日棟燕閣老
人蘇守。本書の著者は誰とも記してないが、
支考が背景に居て蘇守に出版せしめたもので
ある。板元不明。

ナンニヨダキ 男女瀧 ↓ナメダキ 男女
瀧。

ナンフヘイケイ 南部平卿 景山と號した。
能美郡小松の人で岡白駒の門に學び、詩を作
つた。

ナンボカワトヨ 南保一豐 通稱虎之助、
老後之翁と號した。曾祖以上皆醫を以て加賀
藩に仕へたが、祖太左衛門豐立に至つて安永
中初めて興力となり、義經神明流の劍術を善
くするを以て經武館の師範となつた。一豐亦
祖父の祿を襲ぎ、殊に擊劍に長じて從遊の子
弟市を爲した。安政二年異風組兼鐵炮藥合奉
行となり、文久二年祿五十石を増し、慶應二
年組外に轉じ、三年銃隊馬廻組に改編せられ、
明治二年老病を以て致仕し、十八年一月二十
日七十六歳を以て歿した。

ナンボクゴウ 南北郷 鳳至郡に屬し、藩
政時代では、鹿島・會福・根木・志々浦・新崎之
崎・内浦・麥浦・中居・中居南・比良・川尻・波志
借・七海・此木・平野・小又・挾石・地藏坊・上野・
宇留地・河内・廿谷・鹿路の廿四ヶ村を含んで居
た。南北郷の名は中居南・中居北(後の中居)
を本郷とするによつて起つたのであらう。古
く天文元年七月の諸橋六郷南北棟數註文には
南北郷を中居北・中居南・はしかし・ひら月崎・
穴水川島・うらち・穴水大町・鶴島・しかの浦・
からから・にいさき・上野・河内・うち浦・しつ
み・おきのさき・川尻・天神が谷・はさみ石・む
ぎの浦・上しつみ・岩車・ねき・乙がさき・くぬ
ぎ・かしま・そふく・廿七ヶ村とするが、是等の
うち穴水川島・穴水大町・鶴島・唐川・七海・天
神谷内・岩車は後に穴水郷之内大屋庄となつ
て居り、ひら月崎とは比良のことなるべく、
おきのさきは絶滅したらしい。又中居山王宮
藏天正八年五月十八日附長谷部幸恩寺寄進所
附と稱するものに、南北郷三十六ヶ村のうち
七ヶ村として、中居南・中居北・岩車・波志借・
比良・川尻・中谷を擧げてゐるが、この文書自